

# 町史のひとこま

(第二十三回)

## 須恵国民学校の頃(2)

『昭和二十年度卒業生に聞く』

席田に飛行場づくりに行つた

のは昭和十九年、五年生の時で

す。土運び・草取りといった仕事でした

したが、家から学校まで

「しき」や「唐くわ」をか

ついで集まり、そこから隊列を組んで軍歌を歌つて席田まで歩

きました。五年生の体にはたいへんつらいものでした。靴やズック

の不足した時代で、「足なか」をはいて行きました。足半と書き、足裏の前半分だけの「わらじ」のことです。

足半は当時どの農家でも自作していましたが、四年生になると学校でも習いました。鼻緒の部分に赤いきれなどを利用するのが、女の子の精いっぱいのしゃれだった時代です。

大変な作業でした。須恵川から肥えたごで水を運び上げます。班で競争して運んだものです。

男の生徒も、女の生徒も、必死になつて働きました。四年生の

時からで、講堂にはこれから植え付ける芋の苗がたくさん用意

してありました。芋の苗がたくさん用意してありました。

農学校(現柏屋高校)からも農家に手伝いに来ていました。

昭和十九年の秋、学校から各方面に分かれて田んぼにイナゴ

取りの仕事に行きました。イナゴはバッタに似た害虫です。割当では一人二〇〇匹——つかまえたら針金や草に通してつないでおきます。イナゴはものすごくいましたが、集めたイナゴも大変な量になりました。イナゴは、ゆがいたり粉にして戦地の兵隊さんの食料になつたのです。

どんぐりやひまの種を集めたりもあります。ひまの種はひまし油を作るためです。松の木にカンをしばりつけて松根油を採集したりもしました。

五年生の時(昭和十九年)から翌二十年九月の終戦直後まで、男生徒だけで新聞を配りました。朝登校すると、校舎の中の新聞配り部屋(中央廊下のつきあい)に地区の代表(五〇人程度)が受け取りに行きます。代表はそれを地区の配達担当別に小分けします。午後家に帰る途中、各家庭に届けて回るのでした。

朝刊が家庭に届くのは夕方になりました。(夕刊は当時廃刊となっていました)

日曜日も、授業はないのに新聞受け取りに登校しなければなりませんでした。

佐谷の観音谷では、戦後もずっとのちまで、新聞配達は小

学生の役目でした。

新聞配りと開墾の日当が、終

戦後の九月か十月に支払われた記憶があります。一人あたり十

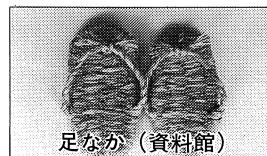
八円何十銭ではなかつたでしょ

### イナゴ取りの割当ても

学生が新聞配りをすることになりました。



小学校(昭和3年当時)の遠景



足なが (資料館)

### 新聞配達は小学生が……

うか。

(次号に続く)

(町誌編集委員会事務局)

戦時中で、兵隊も多く、専能

戦争末期、働き手が兵隊とし  
て出て行くと、人手不足から小